

学 位（博士）論文要旨

看護学専攻 応用看護学 分野	学籍番号 d2233004 氏 名 森本 眞寿代
論文題目	産褥期の母親が母乳育児を継続する信念の 尺度作成と妥当性・信頼性の検討
K e y w o r d s : 産褥期, 母乳育児, 継続, 信念の尺度, 妥当性・信頼性 背景: 母乳育児は母児、社会にも多くの恩恵をもたらす。最近では6か月間完全母乳栄養の母親は産後うつリスクが軽減すると注目されている。しかし、母乳育児継続には精神的影響が大きいと1か月以内に完全母乳栄養を諦める母親が多い。そこで、母乳育児継続を産後うつ予防の側面から捉えることが重要となる。本研究の目的は、産褥期の母親が母乳育児を継続する信念の尺度作成と妥当性・信頼性を明らかにすることである。 研究方法: 本研究では、先行研究を参考に、信念を心が動かされる知覚の抱き方、経験による習慣、想像力の結果として生じる思いと定義した。研究1は、既存の文献を対象にメタエスノグラフィーアプローチを行った。研究2は、アドバンス助産師が在籍する全国40施設に、産後1か月以降2か月までの母親2587人に自己記述式質問票を配布、1005人回収（回収率38.8%）、除外基準に該当する44人を除き有効回答961人（有効回答率37.1%）を対象に探索的因子分析、ロジスティック回帰分析を行った。 結果および考察: 母乳育児を継続する信念の中核的メタファーは『産褥期の母親が母乳育児を継続する動機づけ』であり、継続の精神状態を支えたのは『母乳育児のソーシャルサポート』と、『母乳育児を継続するための環境』であった。本結果は研究2の尺度項目とした。 産褥期の母親が母乳育児を継続する信念尺度として、【母乳育児の意向】【母乳育児継続中の経験から得た身体感覚】【助産師からの継続に向けた支援】【ピアとの共感】【授乳のコツの理解】の5因子23項目を見出した。Cronbach's α係数は.86、折半法による安定性で信頼性が確認できた。内容妥当性、構成概念妥当性が確認され、基準関連妥当性では、日本語版母乳育児自己効力感尺度短縮版（以下J-BSES-SF）と$r = .77$ ($p < .01$)で、強い正の相関、日本語版産後うつ病自己評価票（以下J-EPDS）とは$r = -.31$ ($p < .01$)で、弱い負の相関を認めた。J-BSES-SFとは正の相関、J-EPDSとは負の相関とした当初の仮説は検証された。 また、産褥期の母親が母乳育児を継続する信念の強弱に影響する要因7項目を見出した。オッズ比（95%信頼区間）の高い順に、母乳育児の母親仲間の支え合い2.80（2.07-3.80）、今回の児の1から2か月の栄養が完全母乳栄養2.75（1.96-3.85）、出産前の母乳育児の選択2.19（1.49-3.20）であった。出産後の疲労感は0.62（0.40-0.98）であった。母乳育児の母親仲間の支え合い、今回の出産における産後1から2か月の完全母乳栄養は信念に強く影響し、一方で、出産後の疲労感は信念の形成を弱める可能性が示唆された。 退院後の継続支援として、本結果を母乳育児支援者が活用することで産後うつ予防に繋がる可能性があると考えた。	

1,200字以内、A4版

指導教員氏名（自署）：

濱善 真由美

R7年 8 月 / 日

宮崎県立看護大学大学院
研究科長 久野 暢子 様

学位論文（博士）審査委員

主査氏名（自署） 田中美智子
副査氏名（自署） 濱寄真由美
副査氏名（自署） 中尾裕之
副査氏名（自署） 常盤 洋子

学位論文審査及び最終試験の結果報告書

このたび、審査委員会として、学位論文（博士）の審査及び最終試験を終了したので、その結果について下記のとおり報告します。

記

学生氏名 森本 眞寿代			学籍番号 2233004	
看護学専攻 応用看護学 分野			指導教員氏名 濱寄 真由美 (指導補助教員氏名)	
成績 評価	学位 論文	合格	最終 試験	合格
論文 題目	産褥期の母親が母乳育児を継続する信念の尺度作成と妥当性・信頼性の検討			
審 査 要 旨	本研究の目的は、産褥期の母親が母乳育児を継続する信念を形成する要因を明らかにすること、母乳育児支援のための指標となる信念の尺度作成を行い、妥当性・信頼性の検討を行うことである。予備審査後の修正を確認し、この研究の意義や実際に使用する指標としての課題に関して質疑がなされ、今後、支援者がこの尺度を使用することで、注意せねばならないこと、内容などの見直しについての必要性も説明がなされた。分析方法ではロジスティック回帰分析や折半法に関する質疑があり、適切に回答された。本研究について倫理指針に則った倫理的配慮が十分行われていることを確認するとともに、論文の論旨は、研究目的に沿って、研究方法、結果、考察と一貫しており、助産領域で、この尺度の使用可能性や意義、研究における限界や課題についても検討されていた。本尺度では母乳育児に強い意欲がある対象が含まれていたが、十分なサンプルサイズで導き出された成果であり、広く産褥期の母乳育児の継続を支援する領域で使用されること、今後、この領域での研究を進展させることが期待される。審査委員会では、学位論文及び最終試験を合格とし、本研究は博士論文としての価値を有し、学位授与に値するものと判断した。			